

論理的な英語が書ける本

崎村耕二 著

A5判 314pp.
本体2,400円＋税

木村友保



「英語活用情報辞典」として常備すべき一冊

読み終わって、「大変バランスのとれた本である」というのが第一印象である。

日本の英語教育現場では「英語を書く」というと、一方に「和文英訳」の世界があり、もう一方に「パラグラフ・ライティング」の世界がある。この本は、どちらにも偏らず、必要に応じて両方が求められるという。また、「パラグラフ・ライティング」では「ポイント文はいつも最初にくる」というワンパターンの押しつけはしない。重要なのは内容であって、修辭的効果をねらえば、後にくることもあるという。「書く英文」の多様性を主張している点が特に気に入った。

結論的にいって、この本を読んだからといってすぐに英語が書けるようになるわけではない。著者自身も「英語を書いてみなければ、そもそもライティングは意味を成さない」と認めている。それにもかかわらず、「自分が担当する大学のゼミ生全員にぜひこれは持たせたい」と強く感じたのは、英文を読む時にはどんなことに気をつけて読むべきか、翻ってそれが今度は英語を書く時にどのように役立つか、第一章から第四章まで、実に丁寧に、しかも自作の英文を織り交ぜながら、著者が的確に説明しているからだ。

「センテンスを書く」(第1章)では「英語表現の基本は、述べたいことの骨格をまず打ち出すこと」「次に求められることは、修飾することである。」(p.13)と英語の本質的問題を扱う。日本語と英語の比較をしながら、「主語を決める」ことから「英語の句読法」まで、実際的な例文で明快に解説する。

「パラグラフを書く」(第2章)では「パラグラフは、単なる形式的な区分ではない。大切なことは一つ

一つのパラグラフに内容のまとまりをつけながら書くことである。特に心がけたいことは、統一性を持たせることである」(p.60)と英語のパラグラフの意味を明確にしながら、その形式的特徴に関して、トピック文の役割と配置について、そして最後にトピック文の肉付けの仕方を興味深い例文で説明する。

パラグラフの中はどのように発展させていったらいいのか。この問題を扱うのが「整理する」(第3章)である。時間、空間、階層のいずれを基準にするかで、様々な展開法が可能となり、つなぎ語を用いる場合とそうでない場合とでは異なる。このように発展の仕方にも多様性があることを指摘する。

修辭的効果を含む文章展開法は「展開する」(第4章)が扱う。「具体的に述べる」から始まって、「詳しく述べる」手順や「分類・分割する」方法を、また「個別なものへ内容をしぼる」こと、「一般的なものへ内容を広げる」ことが具体的には何を意味するのか、簡潔に説明する。その他、比較・対照、定義、論理的記述、問題提起、視点を深めるなどの方法についても明確な例文で解説する。

実際に英文を書く場合、何を参考にすればよいのか。それを具体的に示したのが「効果的に表現する」(第5章)である。文体やフォーマル、インフォーマルの違いにも触れる。さらに、大学で英文を書く時に何に注意したらよいのか、また大学卒業後にもすぐ役立つように、校正の仕方、ページのレイアウト、文献の引用の仕方、ビジネスレターや案内文の書き方などについては「文書を作成する」(第6章)が実際的な指示をする。

著者によれば、英語教育の現場は、実際に学習者が書き始めるまでの「一定のてがかり」を与えていないという。そのてがかりを提供するのが「書いてみよう」(第7章)と「ライティングに使える英語表現集」(付録)である。

この一冊を常備し、大いに英語を書いてほしい。英語を書くことを実践すればするほど、この本の真価が理解できるはずである。その結果、この本を読む誰もが「論理的な英語が書ける」ようになると思う。

(きむら ともやす・名古屋外国語大学教授)